

新例冊

新刊



羅伽丹

創刊號



目次

表紙(紙カット).....中西先生	3
創刊の辞.....	4
詩 父のない孤獨な友が母を失へる日：伊久	5
五月の風.....久保田玉喜	4
創作 ひぐれ.....デッス	6
流き交ひ.....宮本洋子	8
行き交ひ.....眞野千代	15
次號原稿募集規定.....	17
詩 六月.....伊久	17
雲.....六角敬子	18
教へ.....箱崎	18
私にもやつぱり.....鈴木奎子	18
祈り.....佐紀枝	19
山峡の夕.....石川八重子	19
墓.....比呂子	20
風.....佐々木洋子	20
短歌 夏.....八幡洋子	21

野ばら.....百合香	21
夏服.....岡美萌	21
雑詠.....石川八重子	21
俳句 まゝごと.....百合香	22
雑句.....高橋紫薫	22
夕月.....六角敬子	22
秋すだれ.....岡田律子	22
春雷.....Y Y	22
創作 會計の日.....デッス	23
會計の日.....奥崎壽	25
落水脈.....橋瑠璃子	27
詩 蟹.....大内克子	24
いよいよ私の時期が来た.....戸田ソノ	35
朝の窓.....金成愛子	35
夜の窓.....堀間壽美	35
創作 暗夜.....伊久	36
編集後記.....	40

創刊の辭

ここに関伽井創刊號をおくる。

内容のまづしいものであることを私達はよく知つてゐる。

しかし私達はここに自らその誕生を祝はう。

私達は生んだのだ。

私達はそだてて行かなければならない。

生れたものが、常に希望と期待とを家庭に與へる様に…………。

私達はこれからの関伽井を私達の生活の灯として育てて行かう。

父のない孤獨な友が
母を失へる日 伊 久

夕の空にこだまして、
高く低く
運命交響樂がひびく、

日がな一日、
岩へ抵抗する波のもろさよ、

死は人生の終止符、
夏の蛾は
大きく飛行

自由さへもたない
憧れた灯は

その小さき身をやきつくす、

悲哀は人生における

長い／＼聞奏曲、
嵐かやつて来る時――
それはどこからか
大きなコーラスとなつて聞えて来る

人の世は廻旋曲
フットパッ
そして幻想であり小夜曲
プレリユード
或る時は前奏曲に序曲となる

次にあがる幕の蔭には
すでに数々の演奏者が
じつと待っている

あゝ友の眼は
じつと母の死を見つめる、
時に静かに

口の中で葬送曲を口づさみながら、

五月の風

久保田 玉喜

もゆる河どての

河揚の影にすわり

河水のはやき流れを見はや

清らけく澄みし水の面に

青くかすみとほりすぐるもの

若鮎にはあらず 河どての小草の影にはあらず

とほき緑の野から吹きて來し

そは五月の風ならむ

五月晴れ

さつそうと吹く風は

河水のせせらぎにまぢり

なにかよき

もののたよりに聞こゆ



耳すまし
吹きわたる風の聲ひそかに聞けば
うれしからずや
今しわれ
そねみ知らぬさわやかな
人の心になりぬ、

ひぐれ

デ ツ ス

九月も終り近い或る日、だいぶ陽のかたむきかけた縁側で、ひとり縫針を運ぶおかくばあさまは、ひと針、ひと針縫ふ毎に小さな赤ん坊の着物が出来上つていくのをうれしそうに布を、いちりまわしては又一心に縫ひ始める。「樂しみぢやいな」

おかくばあさまはひとり言った。

ばあさまはもう年をとつて心細かつた。それにこの間、ちよつとした病氣をしてからは何をしてもすぐにつかれてしまふやうになつた。

「あのときは、ほんとに死んじまいたいと思ひやんしたわい」ばあさまは隣の娘にもかう言つて聞かせた。

ばあさまはたいくつなときはいつも縫ひものをした、それがとてもばあさまの、たいくつまざらしになつた。ばあさまは孫の十四になるみちに腰ぶとんを造つてやつた。みちは喜んで學校に行つたが歸つて來てからボツチャリした丸顔をつくらせて「ばあさま、みらい——」おら學校で笑はれちまつただ」となきながらくどいた。こんなときばあさまはただおろ／＼して、口をもぐもぐさせてやつとこんなことをいつた。

「ばがだでみちは」おらがばあさま、こさつたんだで、おまへらのばあさまに、こさつてもらつたでね——」どつて言つてやるだよ」

ばあさまは言ひながらも子供の顔が妙にふくれてほつべたが赤いのをみるとなだめるやうに「そんなことで、おこんねだな、いまに餅つく日にや、たとえ喰はせるからな」

「ばあさま餅つく日はいま何日ねるとくるだ？」いつのまにかみちはすつかり涼しさうな顔をしてゐる。

みちは十四にもなつて青つばなはたらしにしている。學校でみんなが並んでゐる時ひとり後にはぼんやりたつたりする、先生もおこらなかつた。教室にゐるのがいやになると外へ出て、ひとりで土いぢりなどして遊んでゐた。

「ほれ、みち、だめだでは、着物さよつては、表さ行つて、あそんで、みんな、あそんでこ」「うん」みちは鼻をすすりあげながら立ち上つた。今朝洗ひ立てのさつぱりしたモンベをはかせてやつたのに、もうひさかぶの邊はきらきらしてゐるし、後ろは、どこかで尻餅ついたらしく丸く泥がついてゐる。

「みち、こさ來てみろ」みちは、はにかんだやうな又するさうなうす笑いを浮かべて「うー」と言ふ、ばあさまは、

この子供がむごくでならない。

「みちモンベになしただ？」「うー」「モンベになしただ？遊びさいぐだらべつなはいでいけ」

「うー」みちは又鼻をすり上げながら立つて行つた。

ばあさまは「おら死んでも死に切れねえのは、みちの事はつかり氣にかゝつてよ」と人のくるたびこぼしてた。

みちの母親はみちを産んでから間もなく息を引きとつた。それからばあさまは、赤ん坊を死なせてはと、一心に乳をもらひに歩きまわつて、やう／＼みちがばあさまや、父さまの御飯を欲しがる頃になつてから、みちは腦膜炎をわづらつたのだ、みちが病院からかへつて來たとき、ばあさまは「なんち因果な、休だべいなあ」と言つてまだがんぜないみちにひしと、とりすがつて泣いた。

新しい母さまは、みちが五つのときに來た、みちは、ただ嬉しくて家中かけまはつて、盃の百も並べた盆をけとばしてしまつて、さん／＼ばあさまから叱られた。

新しい母さまは、その日からみちを非常に可愛がつた、みちは、その頃、かあさまが、誰よりも好きだつた、かあさま／＼と言つてからみついた。みちは毎晩だかつて寝た、だんだん來て來るにつれ、かあさまは、みちをいぢめるやうになつた、第一、青つばなを非常にきらつた。

ばあさまは、みちが、かあさまの方がよいやうな様子に、かあさまの方にあづけたのだが一年ほどして、みちを隠居に連れて行つた。ばあさまは、みちをつれて來るとき、ひどく、かあさまたちと言ひ合つた。

「みちは、ばあさま子だぞ、みちは馬鹿だどて、むごい目に、會はせてみろ、みちは、ばあさま子だからな」と言ひ／＼、みちの手をぐい／＼ひつばつて、みちは唯手の痛さに、フウフウ言ひながららつて來た。

今、出て行つたと思つたらみちはもう半泣きでかへつて來た。

「ばあさま、おらやだで」「なにしただ？みち、なにやだ？」「んーうしろの家のちんこが、おつかけんだもん」みちが、かう言つてかへつて來るのは、一度や二度ではなかつた。

「しよりのねー子だで、ほんとにみちは、やがで、あんねになるだによ、あんねが、はなたらしでは、困るだよ」と言ひ／＼ぼろぎれで、はなをかねでやる、みちはうれしうとも悲しうともつかぬ顔で、ばあさまの顔を見てゐる。

おかくばあさまは、こんなみちの顔を見ると、妙に、かけた眼がねが曇つてしまふのであつた。

※ ※ ※

みちのはなをかねでやつた、おかくばあさまはもうゐない。

ばあさまの縫った着物は、毎日みちが守りする赤ん坊が着ている。
みちはばあさまが死んだ事を知らない。弔ひの日に、ばあさまは遠い極楽と言ふところに行つたのだと聞かされた
みちは、ばあさまのかへりを、毎日、子守りしながら待つてゐる。

ばあさまや

なんぼ泊つて来んだべえ

ヤンヤ、ヤンヤ、

空は、夕やけだ、

あしたもいいお天気らしい。



流水

宮 本 洋 子

(1)

「橋本と二人で今夏休みをおじやま致します、來春の受験準備の爲去年の夏の如く尻を落し着かせられぬのは非常に残念です。去年の夏は叔父さんもお元氣でした。今あの廣い家のどこにも叔父さんがいないとは信じられんです……では」肉太に書かれた端書を麻子が受取つたのは、七月の半端過ぎであつた。梅雨が明けて、うだる様な暑さが續いた毎日の生活に、東京の從兄の昇からの便は、一陣の涼風の様に麻子の心を涼やかにした。章一さんも來る——昇の親友である橋本章一との間の一年間に於ける麻子の心は非常な進歩を示している。去年の夏章一を始めて連れて遊びに來た從兄を迎へた時麻子は十六の少女であつた。醫者の父と優しい母との間に唯一人の娘としてすく／＼と十六年の日指を一杯に浴びて育つた麻子は春のエンゼルの様な少女であつた。……しかし一年を経た今、無窮に續く夏の季は變りなく麻子にも訪れたが——豪放な笑聲を部屋中に響かせていた暖かい父、淡白な人であつた父は忽然と世を去つて、今は亡き人であつた。

× × × × ×

麻子が始めて章一を紹介された時、それは出迎に行つたホームの中であつた。騒走と雑多の人氣にむつとむされさうなK驛で麻子が快活に從兄の昇と挨拶を交した後昇、は後を振向いて「橋本章一君、僕の親友、J高校二年、御年十八才。そんなおどけた紹介をして、後い章一に笑つた。目立つて長身の少年であつた。体格が立派であつたがどことなく淋しい感じのする少年であつた。白いワイシャツが何となく麻子の目にしみた。麻子は十六にしては背の高い方ですらりと伸びた四肢が青空の下で動的な美しさをもつていた。

「いやだわ」、そういふのがくせでその後、ころ／＼といつ迄も續く笑聲を立てて、斷髪が頸の邊でゆさゆさゆれてゐるのを章一はびつくりして見た。女にあり勝な、氣取つた風や媚めいた所が麻子には全々みられなかつた。何という無邪氣な女人だろう、章一はK驛での一瞬に思つた。家迄の道程は二〇分程ある。ほこりつぽい白い道が一筋に見え、左邊は遙か迄田園地であつた。青い中にとらうるこしの茶色い毛が点々と見えた。田園の切れ目に、薄紫の連峯がうねうねと姿を横たえていた。右側は傾斜の土手であつた。五、六米、傾斜が續くとならかなカーブを描いて廣い川岸があつた。月見草の咲く沿には十米位の幅をもつ關田川がさらさらと小波を漂よわせて流れてゐた。

「この川は泳げるのよ、向ふ岸へ行く程深いの、海が遠いでせう、村の子供達はみんなここで泳ぐのよ。——泳ぎ好きでせう？」

「うむ。ぼんやりしてゐた章一は、びつくりしてうなづいたがやや頬が紅くなつた。麻子の聲は透明だつた。金屬的な聲を出す女を章一はうんざりしてゐた。女でありながら、しゃがれた聲も章一は、ぞつとする。柔かい衣ずれの様に、高く低く和やかな美しい聲を章一は始めて聞いた様な氣がした。麻子がしゃべると、章一はどうしてもぼんやりその聲に聞き取れ、はつとするのだつた。やがて松林が見え始めた。こんもりと一連の林の蔭に赤屋根がちらちら見えた。

「私のお家、あそこ。」そういつてその赤い屋根を麻子は指した。だんだん近くなると、赤い屋根の下にきらきらと反射するグイヤ硝子も見えた。犬のほえ聲と共に肥つた縁和に感じられる立派な中年の紳士が、遠くに現われると麻子は「あら、お父様よ。」ばたばたと走りながらと軽やかにスカートの裾がひら／＼するのを章一は美しく思つた。嚴めしい程でない白い石の塀が廻つて門から家屋迄の七、八米は大きな御影石が續いてゐた。植込が切れると、芝生が一面にあつた。赤い根の下に総体がガラス戸でしめられ、廣い家であつた。建築は文化住宅らしかつたが、どことなくクラツクな感じがひそめられてゐた。

「麻子ちゃんのお祖父さんがね、スイスに旅行した時、忘れられない思いをこの設計に託したんださうだ。」昇が云

つた。「ツルゲーネフの『父と子』に出る貴族屋敷にもあつたよ、こんな家が。」
麻子はふつと章一を見た。彼女は只何かしら或る神秘的な感じを受けた。夢の様な言葉だ——。
「ツルゲーネフ」麻子は幼少から本を愛して相當廣く讀書をしていた。ツルゲーネフのものも二三冊讀んだが大して氣にも入らなかつた。だが章一の今の言葉を麻子は只——心に残つた。麻子と話した、四五人の男性になかつた或るものを感したが——彼女はすぐ快活になつた。

星の美しい夕であつた。サロンでは麻子と昇と章一の三人だけであつた。シンホニーの曲が終りになると麻子は電
蓄の盤を廻しながら云つた。

「何にする？」

「トロメライ。」章一がすぐ云つた。

曲が流れ出すと章一はソファに深く頭を下げてじつと聞いている。

「橋本はトロメライが大好きなんだよ。」

「いゝわねえ、私も好きだわ。」

章一はやがてぼつと云つた。

「母さんを想ひ出すよ、そして神戸を想ひ出すの、いいなあ、神戸は、白い岸壁もあつた。碧い海があつた。歸曲に沿つて砂濱がつづいてゐるの、赤い屋根と白い屋根が緑の山の下に段々に並んでゐたよ。」

「お母様は。」

「母さん、僕の十二の時死んだの、……そして直ぐ父さんと二人で東京へ来たんだ。」

麻子の大きな瞳はまじまじと章一をみた。可哀そうな人、何て可哀そうだろう。お母様がいらつしやらないなんて。

「母さんは神戸で生れて神戸で一生を送つたの、僕だつて生れて十二迄神戸だもの、生粋の神戸人だよ。早く神戸に歸えりたいたいとも思うの、行きたいなあ。」

章一はふと神戸では、麻子の様な少女が見られた事を思ひ出した。麻子の様に美しい聲でフランス人形の様な少女が但し金髪ではあつたけれど——。

彼等が來訪してから毎日、三人は時々父も混しつて、關田川へ遊びに行つた。麻子はクリム色に朱の模様の海水着

を着ていた。三人はよく競走をした。いつも一等は章一の黒いパンツ姿であつた。昇のすぐ後に麻子が息をはあはあさせて岸へ上る。

「章一さん早いねえ。」麻子は明るく無邪氣に青空の下で笑ふのだつた。彼等二人が疲れて土手に座つてゐると、麻子は一人で亦、泳ぎに行く、小波の間に——白いしぶきを立て、白い赤い海水着が透けてみえるのを章一は美しいと見とれるのであつた。

「麻子ちゃんよく疲れないねえ、」感心しちやつた。昇がからかふと

「だつて面白いのよ。」さういつて亦、水に行く麻子だつた。三人は土手で仰向になつて空を見つめてゐる時がある眞青な空、もく／＼と立ち昇る入道雲……。

「空に行つてみたいわ。」

あの白雲に乗つて麻子が行つてしまふ様な氣がして章一は麻子を横目でみた。やがて麻子は歌ひ出した。

秘めやかに闇を縫ふ

我がしらへ

静けさは果もなし

來よや君

ささやく木の間を

もる月かけ もる月かけ

わりなき思ひの

かの一節

ふわつと空中に浮いて出る歌聲の一つ／＼が眞珠の様に章一の胸に入つて行つた。

(2)

一年の時は再び蘇えつて來た。川土手の月見草は誰も見ぬ夜に寂しく咲く頃である。麻子の胸に十六年の生涯に初めて淡い火を點した章一の思は今も麻子の目の前に浮かんて來る。昇と章一が歸京して一年間に章一との文通はたつた三邊であつた。最初のは禮狀めいた手紙であり、二度目は、麻子の父が亡くなつた時であつた。その日の朝迄、父は、犬を連れて散歩に出かけた麻子はいつもの如く登校して、英語を豫習して來た腕前で進んで居た時彼女は「父危」との報に呼び歸された。麻子が父の許に泣きながらすがりついた時、既に父は天國に昇つて行つた、晩秋であつた

君聞くや音にむせぶ

夜の鳥

我が胸の秘め事を

そは歌ひつ

鳴く音にこめづや

愛の懐み

深き思いをば君や知る

我が心機めり

待てる我に出で來よ君

木の葉のからりとさやく音も麻子の胸に痛い程響いた。母と二人きりの生活、十六の麻子には限らない孤獨な生活であつた。その時、章一の便が届いた。「麻子さん強く生きて下さい。母を亡くした僕は貴女の苦しみと悲しみが女氣のない生活に端々として十八迄暮したあの日から、麻子を心の奥に縛りつけて章一が生きて火となつた。章一——彼は麻子のしづきから見えた赤い白い海水着、空を見て歌つたきれいな横顔、笑ふ時の真白い歯、トロメラクの曲……。しかし麻子も章一も想ふ程、それを現わす事に恐れを感じた。二人は互に逢えば、そつぽを向いてしまふかも知れない。心と矛盾した態度になる事を二人はよく知つていた。三度目の手紙は今年の四月に入つてからであつた。「共に進級を祝ひませう。」「簡単な端書であつた。——章一さんが来る。その日の近づいて来るのが牛の歩みの様にゆっくりと思われた。亦、このまゝ會わぬ方がよいとも、二人は思つた。」

(3)

「麻子ちゃん」呼ばれてもしばし解らなかつた程、昇も章一も大人になつていた。少年であつた章一達は既に青年期に入つていた。伸び来たコンパス、がつしりちた肩幅……。章一さんだ。麻子は我知らず紅くなつた。

「麻子ちゃん大きくなつたねえ、わからなかつたよ。昇が云うと」

「あらいやだ。昇さん達こそよ」とくつくと笑つて麻子は走り出した。父を失つた麻子を何が傷ましい感じて章一は想つていた。しかし一年前の麻子にはやゝ大人になつた感があつたが、やつぱり無邪氣な美しい麻子をみて彼は胸の中が熱くなつた。

「章一さん、來年受験でせう。どこ受けるの？」犬の頭をなでながら麻子は云つた。

「外理科を受けようと思つてゐる。僕、外交官になりたいんだ。」

「いゝわ。素的だわ、本當に。」

章一は麻子がこんなに感激した事に狼ばいを感じてすぐ云つた。

「でも受けて落ちたら、厭だなあ。」

そんな事ないわ。大丈夫よ、母さんの魂がついてゐるじやないの。私も本當に祈つています。と麻子は心の中で云つた。章一は何とも云えない程嬉しかつた。母さんの爲に、麻子さんの爲に、彼は身体に勇躍する血潮を感じた。「章一さん、そうしたらアメリカへ行けるでせう。素的ねえ。」

「アメリカへ行きたいよ、そして神戸から出船をするの。」
そこへ昇が來たので二人は口をつぐんだ。

父の墓は松林の左陰にあつた。その明るる日、三人はさく／＼と柔い土を踏んで墓にまうでた。まだ生新しい墓石の前で麻子は涙が目の中に湧いて來た。「お父様、章一さんがいらつしやいました。心の中で云うと麻子は必死に祈つた。」「どうぞ章一さんをお守り下さい。」章一も昇も各々の感銘を受けて三人は墓石を離れた。川土手の風が麻子の斷髪を舞い上げた。

「私もう髪を長くしなくては變ね、きつと。十七だもの」微笑んで一人言の様に云つた。

「いゝよ、そのままで。」章一は云つたが、ふと麻子の様な無邪氣な少女もやがてパーマをかける様な大人になるのかとたまらなく寂しく感じた。いつ迄もこうしてこのまゝ麻子と二人で居たい——彼は川土手に目を落した

章一と昇が來てから三日目の晩は村祭の宵であつた。

「橋本踊ろうか。」と昇が大聲でふざけた。章一は氣のない返事をしたがそれでも夕飯がすんで暗くなる頃、三人は家を出かけた。麻子は白い浴衣を着て、赤い兵古帯を締めていた。星の光でみた麻子は、ろうたけて見えた。細つそりした白いうなじに丈高い姿は少女期を過ぎた一人の女性であつた。「どん／＼ひやらら、どんひやらら。」太笛や笛の音が騒やかに響いて來る、やがて村の氏神様の境内で踊る一群が見えた。

「僕踊るんだ、橋本やらう。」と昇が生々として云つた。「厭だなあ僕は。」と章一が笑ひながら云ふと昇は「ぢやあ一寸待つていろ」と踊る群に入つて行つた。麻子と章一はだまつて昇の後姿を見ていた。二人は心の中で何かを考へていた。麻子は幸福といふものを父の在世迄恐らく考へた事はなかつた。只、現在で一杯であつた。あまりにも充ち足りた生活であつた事が父の亡き後麻子は痛切に感じた。幸福といふものが、もしこの世にあるとしたら、それは麻子にとつて、今であつた。麻子は太笛の音を聞きながら、只立つていた。すぐ近くに章一がいる——それだけで彼女は素晴らしい世界であつた。その時、麻子は章一が何かを話した様に思えたので彼を見あげた。章一も彼女をみた二人の目が空間でかちつと合つた時、章一はかすれた様な聲を出した。

「いつか——いつか結婚して下さいね。」

低い聲であつた。だが麻子には、雷鳴の様に聞えた。瞬間麻子も章一も眞紅になつた。そのとたん、麻子は無中で一

本道を我家の方に向け出した。麻子は只形容出来ない嵐にこのまゝ死んでしまいたい気がした。嬉しい、口惜しい、恐しい、その何物ともつかない混亂した氣持が彼女を、只ひたすらに母のいる灯を目がけて走らせた。章一は茫然と麻子の走る後姿をみていた。そして、ようやく麻子が逃げたのだと、氣付いた時、彼は、大地に向かって大粒の眞珠を落した。章一は十九である。少年の感覺が、何故、麻子が「結婚」といふ言葉におびえたかを悟る事は出来なかつた。

「麻子さん」章一は一年間の時にこの言葉を口にしたりは心で呼ぶ時、彼は母をつ想た。十二の時死んで行つた母の姿は麻子と合致していた。少年は夢をみた。母の姿はいつしか麻子となり、楽しい家を建設する、母と否、麻子を生、胸に抱いて送る生活！章一のあらゆる想をこめて云つた「結婚」といふ言葉は空しく天に消え去つたのだ。その夜、章一も麻子も苦しい一夜を閉々として明けた。

母も昇も怪しむ程、引き止めたにもかかわらず、章一は明るく日昇と一緒に歸京した。麻子は頭が痛いと云つてすつと起きなかつた。

「麻子ちゃん、昇さん達のお歸りよ」。母が麻子の居間に呼びに来た時、麻子は小さい聲で「今行くわ」と答えた灼熱せる太陽はえん／＼と燃えていた。その庭に、昇と章一が降りた時、麻子は玄關のダイヤ硝子の前に立つた。

「さようなら」章一も麻子も決して見なかつた。昇だけが麻子をみた時、碧白いほつそりした一人の女神様が、きら／＼と輝やくダイヤ硝子の前に休んでいる様にみえた。それは、あまりにも果かないあまりにも傷ましく見えた。昇は何故かは知らなかつたけど――

白い道の上の二つの影が段々、麻子の目から見えなくなつた。遙か／＼の一つの点が麻子をふり返つた様な氣がした「わあつ」と麻子は母の懷で泣いた。子供になりたい。しかし麻子はもう子供の世界にはもどれないのだ。

秋はしのびやかにツルゲーネフの貴族屋敷にも訪れて來た。麻子は瘦せた。彼女自身が感じる程骨ばつて來た。そしてフランス人形の様な目は深くなつて來た。母は毎晩一時頃迄勉強の机を離れない麻子を無理に寢床に連れて行くのであつた。

「橋本は非常な頑張りを續けています、徹夜するのも珍らしくない程です。……」昇からの便を麻子は何度も／＼讀んだ。そして麻子は毎日父の墓に行つて長い事祈つた。

淋しい正月が來て麻子は十八の春を迎えた。麻子はやはり快活な女學生であつた。しかし、時々うつろな時をじつと過ごす事があつた。そんな後、麻子は夢中で勉學を働いだ。章一の幻影は日も夜も一瞬たりとも麻子の胸から離れなかつた。章一を想う程、彼女は精力の續く限り、勉強に努力した。その世界では章一と麻子は永遠に魂の結合する事が出来るからであつた。

長い／＼冬が明けて陽光がさわやかに指して來た頃――章一は無事、京郡帝大の外事に入学した。そして麻子も優等の成績で高校二年に進級した。

京都……そこは神戸に程近い地である。

川水は亦、美わしく流れて行く。どこ迄、天地のある限り、時と共に流れ行くのだろうか。

…(完)…

行き交ひ

眞野千代



漸くして春が立つ。春といつても平年ならまだ／＼去年の冷えの多分に残つて冴え返り身にしみる時候であらうに變り陽氣の今年には珍らしく今時分にふさわしくない暖かさである。こんな日は一日中家にとじこもつてゐるのもどかし面白くもない讀みかけの本の二三頁をめくつてさつさと家を出た。ひたすらに運ぶ歩みにまかせて映画館に入つた。案外面白かつた映画はすつかり彼女を陽氣にくれた。私は濡れた身を列車に托し窓の

外に眸をやりスクリーンに現はれた場面とストーリーとを回想しては、主役をつとめた女優のなまじひな男心をもくつがへすやうな理智のひらめきと、その女優のもつ魅力的な恍惚としたスタイルとに非常な羨やましきを感じた。車窓に頭をつけて、又ぼんやりしてゐた、すると前から頻りに私を凝視してゐたらしい青年と視線が會つてしまつた。私は胸がうたれ一寸の間ぼろろとなつた。妙に自分を凝視している青年にせつかくの空想は破られて

聊か憤がいし、一寸口先をとがらしてぶいと外景に視線をなげた。

「貴女は〇〇さんのお嬢さんでいらつしやいますね。」私は突如に襲はれた重々しい男性の聲にどきんと胸がなり、忽ち耳元がさつと薄紅になるのを感じた、何故この青年が自分を知つてゐるのだらう、しかも偶然の一致で席を同じうするなんて、不安な氣持がしたしかした。

これを話のきつかけに青年はいろ／＼話したした。私もひかへ目に少しづつ話した。汽車は知らぬまにホームを離れてゐた。

彼は二十を三つ四つすぎたと思われる黒い太い眉と黒く澄んだ男らしい眸は魅力的であつた。いつか列車はホームに入り彼は『失禮』と軽く頭を下げた、私も頭を垂れ私達は同様に下車したが、そのまゝあつてなく別れてしまつた。改札口を出ると私は彼をしばしの間なつかしく見送つたが、その後姿は又印象的であつた。

大抵い歸りの道は務めの人や友達といろ／＼話し合ひながら歩くのだが、今日はわざ／＼一人歩きをして車中の單なる出来事か、それとも……と漸く落ついて考へ始めた。そしてあの時の一舉一動を思ひたどりかすかに頬の染まるのを感じ、何かしら淡い幸福感到に満ちていつか微笑んでしまつた。

その晩私は床の中に入つて落つくと又今日の出来事と思ひ出された。そして又いつか彼の人と合はれます様にと思ふのだつた。

その後早くも十二日は経過した、初春のさわやかな風に夢をのせ今日もやはり學校からの歸途である。

驛を出た列車は故郷のホームに入つたが車内は込み合つて降りるのになかなか暇がとれた、人々の後になつてデツキに近づいた時ふと頭を上げるととたん私の胸はどきんとした。あの青年がどつかりと構えて腰をかけてゐる。私は一寸ちゆうちよしたがあわてて軽く頭を下げて、いじわるな事に彼は前々から私をみつめていたらしくニヤニヤしながら禮を返した。彼は私が近づくの待つてひよいと席を立ち、私の後からついて降りた。

肩を揃えてホームの石をザツ／＼／＼ふんで歩いた、私は何か話し出そうとつとめたが、こんな時など皮肉にも何一つ言葉がない、又たとひあつたにしろ咽の奥に引つ込んで何も言ふ事の出来ない。

そしてお互ひに話し出そうと口ごもつてゐたが、ここでも又お互ひにちうちよしてゐる。そのまゝ改札口を出てしまつた。それに運悪く従妹と一緒にたつた。これもそも／＼無言の原因をなしたものであつた。あゝ悪い事をしてしまつた。一言でも言葉をかけたなら青年彼はどんなにか私を可愛いく思つてくれたらう。つく／＼と私の愚かさ感情の表現のきこえないむしろ反對につつ／＼とどんな心弱さが口惜しかつた。

こんな時、もし従妹だつたら相手に對しあの甘いメロデイでも聞く様な笑顔と表情でどんなにか丁寧な挨拶をか

六月

伊久

(つもらぬ感傷にまかせて)

夕の五月雨に早朝の土が濡れた。

せいらぎの訪ふ緑の畑で、一つちぎつた苺は頬紅のはけの様に紅い。

まだ青い部分は泥が小さい輪を作つてゐる、新鮮な感觸あたりの甘い香りがノスタルジャをそゝる。ミルクの中に浮く眞紅な實。

いつしか白秋の「若き日」を口づさむ。

「ビー」と口笛を吹くとこだまする様に郭公が啼く、過ぎたいつの日にか劇の中で牧歌的なその聲が息絶へる翁を歡喜せしめた事を私は知つてゐる

娼よ幸たれ、

人生の挽歌はかくも美しいものであつたのであらうか？

謳へ！謳へ！

木苺の實が枝からおちた

ぐみが白い花を咲く、

遠い里から苗取り歌が流れる

早苗の上を波うたせながら

ふるへつゝ波紋の様に傳波して行く

人の世の文明の灯のこもるのと同様に……

紅だすきと白手拭の色の調和

ゼンヌだつたらカンバスの上にどう表しただらうか

次號原稿募集

創作……二〇枚以内 隨筆……一〇枚以内
詩……三篇以内 短歌……五首以内
俳句……五句以内 (四百字詰原稿用紙使用)
原稿は一切返却しません。
寄稿は編輯部員までとけ下さい。
二十四日坂本光子、五十二日佐藤公子
二十四日諸橋泰子、四十四日西牧富美子
二十四日鈴木千代

だがそんな繪を見た事がないから残念！
虫を誘ふ螢光燈が夜霧の中に散在し淡い淋しさと共に眼にうつる。

おろかな虫よ、

あのうるんだ様な螢光燈はお前を慰めてくれる、

ノクターンではないのだ。

聴け！

白布をひきさく様な鋭い時鳥のうらさびた血を吐くうめき聲を

幼い日「あれはいじわるをした罰よ」と教へられたのを今でも忘れない

そしてこれからもなほ——

しかし無慈悲は人間界の常なれば

おそろく血を吐く斷末魔の苦惱の様な淋しい生涯を送らなくてはすんだであらう。

哀れ時鳥よ

お前の祖先のためそれからお前もお前の子孫もその存在のつゞき限りこの苦しみをさけられぬであらう

私達がアダムとイヴのためにさうであると同じ様に夜の祈りがすべての物の中からひびいて来る

六月はうつろに眼をひらいて来る。

眞晝の夢の様な淡い季節だ

緑深き樹葉の褥にくるまつて山鳩は死んだと云ふ。

雲

蒼空にけあはない

雲の寂しさを

誰が知つてゐるだらう

今日も流れゆく

雲の群を見る

秘々と白い雲

六角 敬子

教へ

私が人生に小さな足痕を驗したのは

細雪の降る宵であつた

細雪、私はなぜかあなたが好きだ

冬の旅人の跡じつた自然に

純白の衣を着せ被けてあなたは教へる

冷たくしかも愛情に満ちた

美はしい清らかな人であれと

貴女を愛する私は

この教いに生きなければならぬ

— 私にもやつぱり —

そうですか……

神様は在るのですか

私にもやつぱり

あるんですか——

鈴木 奎子

祈り

佐 紀 枝

静かなる祈りを愛でて

ひざまづく香爐の煙

鈴蘭の丘

日はうすれ

立ちこめるもやの紫

ほの暗き御堂の廣く

ひとすじの光もれ来る

微笑める白き御像よ

ききてしか

乙女の祈り

うきしづみ大きな世に

かわらじよ清き愛のみ

アベ・マリア 手をのべて

みちびきてよ

永遠のふるさとへ

夕暮の祈りしづかに

きこゆるは御堂の鐘の音

十字架に口づけし

主をこふる 空のあなたに

祈らばや

静かなる祈りを愛でつ

一日の生活を終えり

愛の光は心に充ちて

現實世の夢を知らざりし

乙女の瞳に涙あり

山峽の夕べ

石川 八重子

山峽の宿に夕べが訪れた

あたりは紫紺に暮れて

紅葉の山々がべールをかぶる

ランプに淡い灯がともり

たのしい集いのひとゝきが……

いこひの夜が……

そつと皆んなをつつみに來た

星をかぞえて湯にひたり

友とかたらう

すゝき穂は白くひかり

湯の煙りほのかにも匂う

若き日のこのよろこびに

幸をおぼゆる

つどひし友と……

今日別れていつの日にか又相見ん

若き日のこの思ひ出

いつの日にか……

又迎り來む

墓地

比呂子

試験にレポートに追いつめられる時
物事に悩み悶え苦しむ時
私はつねに裏山の石段をのぼる。
梅雨晴れの寺は
鬱葱たる老松のヴェールを深くかむり
陽の光まだらの境内は
潮風に快くしびれて
外界の物音
一切の文明を知らず。
さんさんと陽のふりそそぎ

無限にただよう初夏の大気を感じる
墓地の一端に立ち
おゝ！わが太平洋は呼吸する
はるかなる水平線！ 防波堤！ 漁船！
まばゆく！
底ふかき本然のリズムに
呼吸する。

くちはてし墓標と石碑は
みどりなす雑草に埋れて散在し
手向けたる器のせまき水にも万象のゆらぐ
ほのぼのと原始のにおひ。

風

佐々木洋子

海邊に育ち海邊に死に
その死の眼にも海邊のひびき
有縁無縁の墓たちは
人の世の寂しさに微笑み
なつかしき素裸の裸は波の音に慄へる。
私に何をなす能力もないことを
他人は嘲り、見すてようと
私の心がいかに荒まうと
常にやさしく両手をひろげ
はぐくむ愛のいづみ
胸躍る平安のふるさと――。

大風が吹く時
私は恐ろしい
そよ風が吹く時
私は悲しい
風がない時
私は苦しい

初夏

八幡洋子

初夏の薄日うけたる花瓶に
紅ばらのうなだれてけり

夏草の花しろく夕暮の
野邊ゆくほどに蛙なきあり

なにがなき想ひをたどる時すぎて
梅雨の朝の起きがたきかな
花摘みてまゝごとをする童等の
心はつひにうばうべしやは
初夏の陽のひかりうけ汗ばめる
額にうつる新緑のいろ

野ばら

百合香

我が指にとらへられたる夏の虫
おもひのまゝのあはれ命よ
贈られしおもひのほどのうれしきに
君をしのびつぽよせつるも
行き逢ひし君に腫をそむけたる
心のおくれをひとりなげかふ

夏服

岡美萌

夏服に着かへし友のあどけなき
笑まひをよしと思へるあした
食膳をかこみてかたるわが家の
姉なきことに心たらはす

雑詠

石川八重子

丹念にけふの新聞よみおえて
つかれしまなこを灯の下に閉づ
寝もやらずみとりてくるゝ母あれば
いすべにたのむ人求むべき



まーいゝ

百合香

紫陽花の葉かげに群れてひな遊び
まゝごとの唇にそなへし春の花

雑

高橋紫薫

櫻ほろほろ舟朽ちて水静かなり
病癒えて髪に菖蒲の節句かな

夕月

六角敬子

夕日あかあか道どこまでも野良かへり

秋すだれ

岡田律子

秋すだれ巻いて障子の白さかな

春雷

Y

春雷のひとつひびいて鳴りやみぬ
夜櫻のもとに何時しか疲れ来て
春雷に心満ちざるまゝにして

雑

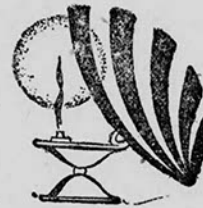
Y

葉櫻の下孤児のたむろして
五月雨や沈みかけたる朽舟

どの家も蚊遣りさなかの嶺山の道

漁場の静けさに梅雨の月

童等の麥笛奏し青き風



だ。

「うん」タケは聲を出して答えた、……あまり大き過ぎた聲に彼女はハッと思つて、土箱の重いのにかつて、「フウー、フウー」二度つけたして誤魔化した。

會計は渡つた、しかしタケの豫想を裏切つて五百圓しか渡されなかつた。

なんでもお上からはまだ金とどこかないので親方が自拂いであるとか、親方は一生懸命言ひわけしてゐた。

「女だがらどでヨ、男と前拂金が五百圓もちがへりや大變だワな」後からオイラ（女たちのこと）にや、もつとよこすんだつべが「女たちはヒッヒン言ひ合つた。タケも「ほんとにヨ、全くこれつばかりの金ぢや喰つていけねえよ」口をとがらして言つた。

すくなくとも自分は他の女たちよりは働き手の心算だつた、タケの手は男の手のやうに硬い、そしてゴツゴツしてゐる、自分の手を見ても分らうにと手を見ながら思つた。

前の家の小母さんといつてだつて、「タケちゃんの手はナンボ力があつか分んねえネ、鬼ともつくわむやうな手してる。」

タケは、この男のやうな手に一種の誇を感じた。

「すべての責任がこの手の中にある、義雄を學校に上げて、出世した子の姿を想ひ浮べる。」

孫を守りする年老いた幸福な、静かな自分の姿を想ふ。

會計の日

デッス

たゞださへ汗が出る眞夏の太陽は、赤黒い肌をジリジリと焼く。

この村の山を切り開いて、M町までの道路工事の仕事場には七、八名の筋骨たくましい男たちに混つて十二、三人の女たちが働いている。

彼等の顔は皆、陽にやけて、同じやうに赤黒く、言ひふるされた、形容詞を用ひれば、まさに赤銅色である。

タケも彼等の中に働いてゐる。木箱に土をつめては運ぶ作業をする、なか／＼らかな仕事ではない、けれどもなれた手つきで「よいしよつ」としよいあげるあたりいかにも輕さうに感じられる。

今日は會計の日だ、いつもに増して、タケは少しせききみに、一心に仕事をする、早く終へて、あとを樂しまうと思つてゐるのだ。

「今日さ、十五日日だがら、なんぼもらへるかな？ 一日百圓位にはなつべから—土いぢりの仕事だし、こわえ—仕事だもの—千五百圓位手に入るわけだ、そしたら今度、義雄にスタンドでも買つてやるか、欲しがつていたんだから—」

タケはこんなことを心のなかで言つていた。

「かあちゃん、スタンド買つてネ、ネ」と言つた、上の子の母をすきみるやうな恰好をした姿がありありと浮ん

しかし、次の瞬間、彼女は、彼女には、支へきれない、重たい、苦しい現在の自分を見出すのだつた。彼女は子供の成長を唯一の楽しみとしてその他の楽しみを欲望を、打ち捨てた、つもりでゐた。……

……けれども、十餘年も夫とのちかづきもなく、ひとり寝の毎日毎日に、彼女の心にかすみの様な不満はしだいに深くなつた、末の子の朝寝をむやみと叱かつて見た、家の中に薄暗い空気のただよふ時、彼女の魂は、キヤッ、と笑ひころげた。

冷い女！やさしさも暖かさもない女！ひからびた女！彼女はぐつとつばをのんだ。

「うふ」鼻にかかつた、うすわらひの聲は更に冷たかつた。

父親ちがいの子を二人も産んで、今の夫も又、義雄の父と同じ病氣で伏している、「亭主喰い」「うふふ……」タケの眼は動かすにただ口だけゆがめて笑つた。

今日もらつた五百圓をふところに、タケはふらふらとふらつく足をひきずりながら歸りかけた、傾いた夏の陽は彼女の顔を斜めに照して、空虚な眼を反射してゐる、無意識の様に歩みをつづける。

仕事仲間の田村の顔が向ふに小さく見えた。その顔がだんだん近づいて大きく彼女の眼一ぱいに廣がつた。何かに突き當つたやうな感觸にタケはハツとわれにかへる。

蟹

大内克子

潮満ちくれば穴に入り

潮ひきゆけば這ひ出でて

ひねもす横に歩むなり

東の海の砂濱の

かしこき蟹よ今此處を

運命の浪にさらはれて

心のづしの燈明の

汝が眼よりも小やかに

何を思ふか枯淡はさみて

行方も知らに歩むらむ

辿り行くとは知るや

知らずや

「水脈」

奥崎

壽

さざれ寄る川波は青白い光を受けてキラキラと輝いた悲しみに閉された胸は、魔の神の手の様な月の光にぐいぐいと引つぱられてゆく。光る波、動く波、生きてゐる波それは實際一時もじつとしてはゐなかつた。波が上に乗る度毎にその波の峯が月の光をうけて輝いた。涙にかなんだ視野に今にも泣き出しさうな星が輝いてゐた。

美しくあやしい波は向も踊りつづけてゐた。月に誘はれて、此の波の底に吸はれて行つた人の靈が其所此所に放浪してゐる様に思はれた。この波を鋭利な刃物で断ち切つてそのまま氷らせてしまつたら……そこには詩の國がある。夢の國がある。永久に無限の夢の國がある。……千曲の清流に觸れ様としたが、無駄だつた。息苦しい様な夜の莊嚴さが胸に迫つて来る。遠くから汽笛があたりの静寂な空気をふるわせて耳許まで迫つて來たと思つたらぶつたりと消えた。

突然私は何者かにつかれた様に提に驅け上つた。遙か彼方にぼつり一つの燈が月明りの中に赤くまただいてゐる。その向ふに、何かオレンジ色の希望の光が見えた様だつたけど淋じかつた。孤獨感がひしひしと胸に迫つて來るのを覚えてたまらなく淋じかつた。

淋しいなんて、安價な乙女の感傷だ。いや感傷に轉嫁しやうとする乙女の甘えた心理だ。さなければ贅澤な

人種の氣まぐれだ。と思ひ笑つてゐた私ではあつたが何故か淋じかつた。

幾山河 越えさりゆかば

淋しさの

と秋水のこんな歌が想ひ出される。

私にとつては實に譯のわからない淋しさだつた。

濱の松の木陰で大地の底を傳はつて來る潮鳴りの偉大な反響をじつと耳にして、ただずんでゐた。水平線は無限の青をたたへてゐた。

天馬船の水脈が消えてゆく時、利根の西には殘陽が刻々と深んでゆく。暗い水面には灯が一行に並び港に歸る漁船の灯が一際紅い。

ボーボーと斷續的な夜船の汽笛、まともに吹きつける霧雨の中に傘もささず友と二人、荒れて押寄せる浪に強い自滅を感じてゐるえた。

やがて私は黒潮の流れと、荒狂ふ白瀬の怒濤、白い燈台、松林の間道を通つて詩人今井白揚と三富朽葉を君ヶ濱浪痕の碑に偲び波邊に、か細い千鳥の跡を探しながら夕暮のもやの間を歸つてゆく帆船の櫓と、そして又夕暮のむらさきと斷のカクテルされた匂ひに満ちた町へ、歸つて行つた。

なつかしい友を尋ねて銚子に遊んだ一昨年の十二月、それは高原の山氣に守られて沈黙の中に人の心を沈めて行く山の香の中に育つた私は、海の神秘を知らなかつた。たまたま修學旅行その他で海を訪れることはあつても徒らな興味と憧憬に心を浮き立たせる許りで一切の飾をすてた海の眞の叫びを聞き得なかつた。

暖流と寒流のかみ合ふ大吠の海は、瀬戸内海に見る様な白砂青松でもなければ相模の海の様にもうらうとした長閑かな南國の海の光景でもなかつた。ここで唯はるかなる沖合から岩石目指して突進して来る怒濤の音が濱の松をゴーゴーと氣味悪く響かせるのが聞えるだけだつたけれども私達として飽くまでも人生を考へさせる底力のある叫び、怒濤の強い教示がしみじみと感ぜられるのであつた。

そこに鈍重な奥行のふかい東北人の叫びがこんなものではないかとしみじみ考へさせられたのだつた。

そして、怒濤について、こんな歌のあつたのを想ひ出したのだつた。

海は狂へる

岩にはばまれし風とあらがひ

曇れる空

あてもなき叫びをこだまし

波は波をよびかひ

ひねもすを

陸を戀ひては奔り

敗れては返し
堪えがたき熱情を
あらぶる波濤につゝみて
しるじろと寄せて来る悲しき奏よ
時空を絶し

この世のなべてを
美しき紺青に塗らんとする
海は狂える

海は狂える

狂えるは海かわれか
限りない混池の中に
わが眼はますますすみ

わが耳はさらに鋭し

われ汝が姿に、なにをもとめん
聴かまほし

あたらしき春のいきづき

などで春やかく遅き
海は狂える



落日

橘 瑠璃子

校庭にも又ボブラの葉がかさ／＼と秋らしい風を立てる様になつて来た。

土の上にぽつちり投出された仲子の影は余りにも小さ過ぎる、余りにも淋し過ぎる。

黄ばみかけたボブラの幹にもたれながら今日一日の出来事を静かに考へ赤々と落ちて行く日を見つめてゐる。

岩崎さんのあの言葉が、まだ耳にこびりついてゐる。『一年生のくせにあのお辭儀の仕方』さうだつたかしら、

そんな筈はなかつたが、また矢張り歸つてこない兄の事を考へてゐたのだと思ひ悲しさが胸にこみ上げてくる。

仲子はN高女の一年生である、家を離れ、寄宿舎に入つてもう半年はすぎ、大分慣れては来たが、矢張り時々『ホームシック』になつてお部屋の人を困らせた。少し赤毛のオカツバで前髪が長く稍内側に曲つてゐる。

愛らしい口元はひきしまつて却つて淋しさを表はしてゐる。

一口しゃべると中から眞白い齒がのぞく、母が『齒と目の美しい人位感じのよい人はゐない』と言はれたのでいつも

齒はみがき美しい齒の持主である。朗らかな一面に淋しさを抱つてゐる。時々だまつて窓から白い秋の飛雲を

見ながら、何か考へている様子は一年生にしては少し大人びてゐる。彼女は家庭はとていゝが、學徒として出陣し

て現地に行く途中九州の沖合で死んだ兄、仲子が一番信用し頼りにして来た兄の死が非常に彼女の心に大きく響いた

女の中のたつた一人の兄の死は母をも急に衰へさせてしまつた。死の知らせを受け取つてぽう然とした。母は時々寢

てしまつたり海に行きたがつたりした。

勝氣な父は一滴も涙は見せなかつた、兄の死以来の仲子の態度は百八十度の轉回を示した。淋しがつた事のない様

な仲子は夕方校庭に出る事が一番うれしのだ。上級生の態度、一番氣になる。満智子さんは何が原因で氣げんが惡

いがどうしたのだらうか。とすぐ考へる。上級生。たつた二年生しか違はない人達が先生よりも恐ろしかつた。

勉強の爲に入つては来たがこれぢや上級生の女中よりもひどい位である。勉強もそこで、用事をしなければならぬ一年生、仲子は悲觀した、無望もした、憧れの女學校も過去の夢と消え、今は夢もない、唯現實にこたは

つて行く自分の姿を見て悲しくなつた。生活は彼女にとつて新しい悲哀へと、暗い經けんを見出して行く事に過ぎない様は思はれる。

一日の内で自分を慰めるたつた三十位を一番有効に過すのはこの事だと思ひつゝいてから、彼女は雨の日を除いては毎日校庭に出た。

後でかたかたと下駄の足音がする。振り返ると奥竹二室の印南泰子が歩いてくる。

お部屋の上級生の話では都立第六からの轉校生であるさうだ。「何していらしたの、ホームシックになつてはだのよ」

「割に太い聲ではあるが、とてもその聲に仲子はびきつられてしまつた。しかしまだ一度もお話した事のない上級生になんて答へていゝか迷つてしまつた。上級生は先生より恐ろしいと思つてゐる一年生は急に言葉をかけられて迷ふのも當然であつた。しかし無理に心を落つけて口を開いた。「いゝえ、何もしてませんの、唯急にこゝに來たつて」と夢中で答へた。心に思つてゐる事の何十分の一、何百分の一しか話せない。

「仲子さんはいつもこゝに來てゐるのをお見受けするのよ、さうでせう」「いゝえ、えゝ、唯なんだかこゝが好きですの」と言つたものの、誰かが見てゐられる様で「あたし歸りますわ」と一目散に走つて、お部屋に來たものの後から笑はれる様な氣持がして後で「なんて馬鹿だらう」と思つたりした。

お部屋につくとすぐに數學を知らせる太鼓が地響と共に響いて來る。つい此頃まで軍需工場で働いてゐた三、四年生も授業は復活したもの、何となく落着いてゐない。それに未開墾地を開拓する作業は二日目毎か三日目毎に行ふのでまだろくろく授業をしてゐないと同じなので、眞剣に勉學にいそむ人は少ない。くだらない話や手紙書きで時間を浪費する人も相當あるらしい、しかし一年生は割合にどこのお部屋でも眞剣だつた。仲子の部屋では一年生二人と三年生の昌子が努力型であつたらしい、なにしろ室長の篠原満智子はサボリの大家である。二年頃までは委員なんかして中々勉強家らしくあつたがあの戦争の爲に工場に行き、悪い環境の中にゐたせぬか次第に「品行方正」に遠ざかつて行く。満智子も戦争犠牲者の一人であると仲子は考へた。

次の四年生の岩崎佳代子は東京都立の20とか23とか言ふ名も聞いた事のない様な女學校から來た方なさうだが、戦災で父を失ひつゝ此頃母も失つた、「みなし子」である。それに疎開して余り血のつながつてゐない家に來たとかでそこからは冷たくされる。姉さんの一人は名古屋にお嫁に行つて、もう一人はもうすぐ行くとかで誰からもかまつてもらへない人である。

それで自然に冷たくなつたのであらう、暗い事と言へば養生百名近くでも一番であることは確かと言つても過言ではない。

ない。

人の言つた事は何でも、要から解釋する。それが善意ならばともかく、悪く解釋する。社會の中、荒波の中を横切るのに裏面をみていつたらきがない。悪い事も善意に解釋すれば、丸く収まる事も、反對から考へるので丸い事も四角になつてしまふ。この人はきつと一生不幸になるなあ、と小さい仲子は考へた位の人であつた。それで他の人も冷所たい目で見つた。それで一應、冷たさで固まつた人になつたに違ひない。しかし如何なる人間にも必ずよいはある。佳代子は皆の居ない日曜日等一人で食堂の側のオルガンを弾きながら「讚美歌」を歌つて居る姿を仲子は時々みかけた。自分の淋しさをまぎらす唯一の楽しみであつたらしい。

「又會ふ日まで」は余程好きであつたと見えていつも歌つてゐた。この時の心はきつと眞實、誠實な、美しい清い心であると思ふ。しかしなぜそれをいつも表はしてくれないかは仲子の疑問とする所であつた。しかしそれは仲子の未だ経験した事のない父の死であり、母の死に違ひない。

もう一人は齊藤フミエで背は小さくて丸々と肥つており、第一印象は誰しも「お家は農家」と言ふ事がわかる。明るくて朗かいつつもここにこしてゐる、フミエを仲子は好きだつた。

仲子は家から來た手紙をだきしめてホームシックになり、大聲で泣いた時も慰めて、共に泣いてくれた人であつた。三年生の照子は色の黒いガフガフな人であるが、仲子を一番可愛がつてくれた。器用なのでお裁縫はしてくれし、圖書も書いてくれた。しかしお天氣屋で朝はともおもしろいが、夕方はブスウとし、夜又回復する事は常である。その様な時は仲子は知らん顔をするので却つて難をまぬかれる事もあつた。白轉車も教へて貰ひ、いつの間にかグリーン狂になつたのも、照子の影響であつた。一年上よりも一年飛んだ上と氣が合ふのはこの學校でも同じである。二年生は一人で湯桶後子である。ちよつと世の中でこれ程勉強しない人も稀である。細かい事が好きで袋や財布に下げるお人形を一日中作つていた。誰にでもすぐくれた。しかしこの人の家は代々男は氣狂になり俊子の上の兄は、早稻田の中途より發狂し、下の兄は高等學校一年から發狂し、座敷牢にゐるさうである。さう聞かされればなる程と、うなづけられると言ふのは、時々夜「死ぬ！死ぬ！」と言ひ出して泣き出す事もあつた。又急に笑ひ出す時もあり、始めはお部屋では氣持悪かつたが次第に慣れて來た。上級生は精神病院行きだと言ひ合つてゐるらしいかつた。夏の犬の様に舌を出して働く様子や消燈前三十分頃日記を行き取り出しそれをつける事を慰めか、喜びか、楽しみにしてゐるらしい。

「これを見られたらその人を殺す、そして私も死ぬ」と言ふのが口癖であつた。

一年生の世話を受持つ二年生は責任重大である。一年生が悪ければ二年生が悪いとさへ言はれる。入舎したその日に寮舎中を廻り、大休の仕事をおぼえるが俊子は働き者のせむか、一年生の仕事も二年生がやってくれたので、両方とするものと早合点してしまふ。

仲子も迷つたが照子に習つてようやくわかつた次第なのである。もう二人のお部屋の人は昌子と邦子で姉妹である。邦子に悪いところがあつてもお姉さんがいるせむか非常に注意しにくらしく、仲子を通して行つた。仲子と邦子が口論すると昌子は邦子につく、仲子には照子とフミエがつくのでお部屋を二つに分かれされてしまふ。仕事の取りつこでのけんくわでその根本は上級生のひょうばんをよくしたいといふ慾望の表はれである。上級生がかりと動くともう私の全神経が百二十％に緊張する。

學校がひけると、ころげる様にして歸つて來、お部屋を美しくして上級生の歸りを待つ。三日に一回づつ新しいお花を買ひ、上級生のお贈當を洗ひ、おさうじをして夕食も盛附けなければならぬ。

夕食後の三十分位を利用して仲子は休息と反省と夢との爲に校庭に出る。「夢を捨て、しまつた人間は死ぬだけよ」と照子に言はれた言葉を思ひ若い乙女が夢をなくしてしまへばもう最後である。「理想を高くもて」この言葉の通りに生きる事を誓つた仲子であつた。涙でくれた時はもう過去として忘れようとつとめた。

夜は本當に一日の反省をする時である。しかし精神、筋肉共に動きつかふ後は唯ぐつたりして起床の太鼓の音まで夢を見ないでねる事も多い。

封建的の寮舎も、社會の荒波をよこ切る試験である。「苦あれば樂あり」の諺の様にいつかは楽しい幸福な寄宿舎のくる事をはかない望みとして過して行つた。

『自由主義だ』『民主主義だ』と言ふ言葉は誰しも使ひたがる。しかし眞にわかる人は何人いる事だらうか？眞の自由デモクラシーとか盛んに言はれるが、七十年と言ふ傳統を有するこの寮舎には、平和な自由の春は中々來さうもない、「前途程遠し」である。

朝起るから夜寝るまで一つの課業も慰安も休息もない、こゝに一日も早く明るい春のくる事を、輝かしい朝のくる事を祈らずにはゐられなかつた。

時々開かれる室長會議の話題と言へば、下級生の批評に過ぎない。「桂二室の一年生は割合に働くが、点取虫だらね」とか「櫻四室の下級生程ちやつかりしているのはいいわ。食器洗ひでも、洗面所でもさつさつと行つてしまふんだもの」「それに呉竹一室の三年生はあんな人いやしな、四年生に向つて口答へする、仕事はしない」とかを會

議室で話をしてゐる。

如何にしたら明るい影のない寮舎にするか位考へるべきである。

しかし仲子の考へは彼女一人ではなかつた。いつか秋の夕方に話した事のある印南恭子もその一人であつたに違ひない。でも、彼女達の心が實現される事は不可能であつた。

でもはかないのぞみは捨ててゐなかつた。

室長會議を終つても時々四年生は集つた。

なんだかは知らぬが悪い下級生を注意すると言ふ話であつた。仲子の隣の部屋に東京から來た大貫和子と言ふ人がゐた。オカッパの一年生の中に一人オール・バックにして、紺の素適なスエーター等を着て學校に行つた。皆がモンベの時からズボンをはいてゐるハイカラさんである。田舎から來た四年生を少しからかつたり口答へはする。お掃除はサボル等で上級生からのにくまれものの代表的な人物である。

四年生二人位だとまけるので二十數名位集めて、寮舎言葉「のす」を行ふらしかつた。

高橋先生のお泊り番を選んで行ふらしい。仲子のお部屋からも満智子と佳代子が行つたらしかつた。仲子は氣分が悪かつたのでうとくして來た。かすかな寢息がもれて來る。

食堂の時計は十時をうつた。間もなくしてみしみしと足音が聞える。しかし話し聲一つもない、寢静まつた長い廊下を歩いてお隣の部屋をガラ／＼と明けた。誰かが電氣をつける。

部屋の人達はびつくりして目をさます、その時は既に四年生は立ち並んでゐる。誰もまだ口を切るものがゐない、沈もくの内に時は去つた。そこで櫻の寮長さんが口を切つた。「大貫さん起きなさい、何をぐず／＼してゐるの。早くたら早く、まどろこつ事いささか大貫和子も吃くりしたらしい。床の上に坐つた。他の人の着物のねまきに比べて和子のはシンガポールのおみやげの、ハイカラなパジャマである。

ウェーブ式にくせつた髪が亂れてゐる。次にしゃべり出したのがその部屋の室長さん。早口でよくわからないが物凄く悪い聲である。言ひ終らない内に皆がその周りに坐り圍んでしまつた。當てこするの過ぎた男の口論の様に物すこい聲であつた。の／＼しり、これ以上ないと言ふ様な悪口を浴びせかけた。同室の人が最も驚き一年生の玲子は恐怖と不安とそれに何と言つてよいかわからない氣持で聲を立てまいとして泣いてゐた。本人の和子は寮長の顔を見たつきりかたりとも動かなかつた。この心臓に四年生は又もやびつくりしたらしかつた。

隣室では仲子は余りブライドを持たない上級生に對して驚きと噴りを感じた。縣一の傳統と誇りを持つた學校の最上級生がこれでよいものだらうか。照子の言ふのには昔はまだ「ひどいらした」と聞いて想像する余地がなかつた自分達の時にはもつとひどかつたと言つて、そのいやさをもう一度下級生に經驗させる必要もない。自分も苦しかつたなら他人もよけいに苦しませる必要はどこにあるか、いやな事ならやめるべきが當然である。

教養のないと言はうか、何と言はうか、言ひ表す事が出来ない。

上級生は一時はかりして歸りすぐ床に入つて十分をたない内にすやくと寢息を立てゝねむつてしまつた様であつた。仲子はこの寮舎がとて恐ろしくなり中々ねむつる事が出来なかつた。欄間から月の光が皆の睡顔を寫してゐる。どうして『のす』前に注意しなかつたのであらうか。一回か二回にいつてからでどうしてもきかなかつたのではやむを得ないかも知れないが、何しろ何も言はずに突然なので――。

次の日昨夜何もなかつた様におだやかであつた。學校より返つて來たらば『大貫さんの無斷歸省』と言ふ事が寮の中を賑はした。本箱も机もよく整とんされ押入れを片附けて歸つてゐる。

その日のお泊りは甲斐先生であつた。この先生はT縣一かたくて六十近いオールド・ミスである。身振りのきちんとしてゐる事。眞白な足袋でない時はなく。目鏡の下からおそろしい眼かのぞいてゐる。手ぬぐひのかけ方だ、歩き方が亂暴だ、と打水の水がきたない等、どんな小さな所にも氣がつく、舍かんになつて二十年にもなるのだからきびしい事も廊下の美しい事もT縣一らしい。この先生のお泊りの日はどんな上級生だつた絶対に騒がない。三寒四温の様に定期的な温しさである。

さて元に戻つてこの先生のお泊り日に室長さんと寮長だけが呼ばれただけで事を解決したらしかつた。一週間して大貫和子は東洋英和に轉校したさうだ。お母さんとお姉さんが來て荷物をもつていつたのは、しばらく立つてである。仲子は不安な氣持を抱きつゝ押しつめる様な冬の空を見上げて、ため息をもらした。

仲子もどこかに轉校したいとまで思つた。つまらないのでもと來た道を引き返し、重い下駄をひきづりながら校舎のまがり角まで行くとばたりと會つたのが印南であつた。二人はにつこりと笑つた。

『此頃のお隣のお部屋おそろしくなかつた』で仲子は『えゝ少しでも、色々考へましたわ』そして仲子は急に力強く『私達上級生になつたらばそんな事絶対にしないわ』すると恭子は『上級生も下級生も同じ人間ですもの、萬事平等よ。たつた二、三年早く生まれたに過ぎないのよ。そうしたらば廊下の様に美しい人達の集りの寮が出来るわ。』

私達はそれを見ずに卒業するのですもの。つまらないの。貴女達の時こそ、そうさせてね、お祈りしますわよ』と淋しく笑つた。

この言葉がどんなに仲子の力となつた事か……一日も一刻も早く楽しい寮生活が出来る事だ。印南と共に邁進しよう」と口には出さなかつたが、心の中で叫んだ。

これを實現化する爲には先生との協力が必要である。それは今度新しく合かんになつた阿久津先生に話したらば一番早く出来ると思ひ、或る日の放課後、印南と二人でお話した。先生も丁度その事を考へたとかで、近く全寮生と打ち合はせるとの事であつた。

仲子の胸は高鳴り、近き將來を色々想像して、それから一週間位過ぎた土曜日に全生徒食堂に集合して、『寮の民主主化』と言ふ題を提供され、しばらくは沈もてあつたが、印南恭子がトツプを切つた。古い傳統あるこの寮の民主化の第一歩は上級生、下級生の間もつと親しく打ち溶けなければならぬ。正しいと思ふ事は上級生の前でもやり通す事、又平等でありますから掃除も皆でやるべきであります。

いくら上級生と言つても規則はあくまで守るべきであります。』と言ひ終ると口をきりゝとして坐つた。仲子はしんとした食堂も忘れて夢中で拍手をした。その音はだん／＼と數が増し、最後には食堂のガラスがこわれる様な大拍手となつた。次に下級生が次々と立つて『二年と三年とは一年しか違はないのにどうしてこんなに差別があるか』とか『花代は皆で持つべきだ』『悪い人はお部屋だけで解決したい』と活潑な意見が出た。仲子は『起床の太鼓を鐘でもいゝから變へてもらいたい。理想的な音楽で、美しいメロディーを聞いて起るとその一日はどんなに楽しいだらう』と言つた。

『よそのお部屋に行くのに廊下に坐り、廊下にひざまづいてお辭儀をするのを變へたい』等色々意見が出た、仲子は皆がこんなにまで考へている事を知り驚きと共にうれしうれしうれした。何月も考へてゐた事がこんなに早く實現するとは夢の様な事であつた。三月頃より次第／＼に開けていつた。

上草履も許され、太鼓も鐘になつた。學年でも襟カバが二年ぶりで復活し、東髪も自由となつた。日一日いや一刻と自由の鐘のなり渡る平和な花園に近づく様に思はれて、永い間の苦しみも次第に、糸のほどける様になつて行つた。

三月も終りに近くなると四年生は卒業した。校門まで送つて行くと、永かつた一年も短かく感じ、送つてしまつた後は何だか氣がぬけた様になつてしまふ。岩崎佳代子を送る時は紀念館の當りから『仲子さん、随分わがまゝしてご

めんなさいね、自分で知りながら淋しさを、悲しさを、まぎらす爲に、でも却つてそれを増すばかりであつたの、心のきれいな人になつてね」と言つた佳代子の目には涙が一杯たまつてゐた。

仲子は「さようなら」と言つたまゝいつまでも手をふつてゐた。「心の美しい人にあつた刹那、人生の光を見出すものである」何かの本に出てゐたこの言葉が急によみ返つて來た。

印南と別れるのは一番悲しかった。校門まで送ると却つて悲しいので玄關の所で「さようなら」と言つたまゝふり向きもしないでポプラの木の所に走つて行つた。そして止めどなく流れる涙をふこうとしなかつた。

新學期が始まつても仲子は夕方校庭に出る事をかゝさなかつた。

夕ごとに恭子が尋ねて來る様な氣がしてならない。

仲子はじつと立つて夕暮の空を見つめてゐる。

落日を見る時は恭子の佛を偲び

落日を見ながら別れた恭子を想ふ。

各種糸類
手藝材料

ハシモトヤ糸店

平市銀座
電話 14番

開店致しました

修繕は特に迅速：町囃に：

政井時計店

平市白銀町九
(平郵便局前通り)

いよいよ私の時節が來た

戸田ソノ

いよいよ私の時節が來た
私の歌のなかへ木の芽のように

物堅くねむつていたあわれなものが

一せいに息をふき返してくる

蟻や蜂やかげや目にたないものが

躍り出してくる

夜や晝か虚空や大地が

山村や町も勇み出してくる

私のひろげるつつましい宴のなかで

生きとして生けるものの臆病に内部に

隠した本性が

乙女等の頬笑みのように明るく表われてくる

見違えるくらいそれが

今まで一度もあるかなかつたものが

私の歌の中で

ずんずん歩き出す

「朝」

金成愛子

朝は潮の様に

ほの／＼と大らかに

うすいピンクの霧の中

今、美しい夢から

目ざめ様として居る
陽の神の参上と共に……

星達のお話は

いつ終つたのか

光も淡く

乳色の空遠く

静かに去つてしまつた。

私はやはらかく、そして

静かに口笛をふいて

この清らかな朝の

目ざめを待とう

清潔と幸福とを運んでくるこの朝の……

「夜の窓」

梶間壽美

黄昏の空に

甘き風がそよぎ

野の草は夜の露を宿す

星のかけ空に消え

仄かなる光を注ぐ

遙かなる海に

彩雲棚引き

渚に寄する波は白く

細き月浮び出て

仄かなる光を注ぐ

☆ 暗 夜 ☆

伊 久

小井濱へ通ふマツチ箱の様な臨港鐵道の乗り換へ場になつてゐる、湖水村はその名に似あはず、いつも雜然としてゐる所だ。

常磐線の上り下りの汽車がつくたび、混つた空氣は捧切れでかきまはされた小器の泥水の様に、ます／＼ひどくなる。生魚くさい、それでいていやに乾燥した、ほこりつぽい、およを行つて見ぬ人にはわからぬであらう。

まして驛前等は心うかぬ所だ。こんな所に住むのは住む人も仲々苦勞だらう。だが「水清くして魚すます」とか案外こんな所でもかまどの煙を立てゝいる人でも「別れ」を見れば寂しく、異性への懷れを醉ふ様に感ずるのだ。

實枝子も、かれらの中に生きる一人の少女。元録細に紅緒の下駄で、ままこと遊びをしていた幼き日、父は逝き、弟と妹との三人姉弟は、若くして美しい母に育まれて來たのである。彼女らの母は優しくつた。そして強かつたのだ。幼い三人の子を育てる術について、幾夜枕をしめさせた事だらう。

遂に店といふには少し變ながらも店開きをした。子供達の喜びは常に家庭の中に明るく花を咲かせ、若い母は歡喜の歌をうたつた………が愛の神キユービットはむさんにも、この家庭に、いたづらの矢を放つた。厳格なミツシヨンスクルの出身者ではあるが、何とい

つてもまだ若く美しい未亡人である彼女は、年下の或男性と關係のきづなを固く結んでしまつたのである。思春期に入らうとしていた實枝子や弟妹達にとつて、最大の變化だつた。

どれほど寂しかつたかは、おしはかる事が不可能だ。父の愛を知らぬ特殊な幸福は、今までの彼女達にとつていやと言ふ程強く感じさせられて來たのだ。

殊に實枝子は苦しんだ。早熟だつた彼女は、少なくとも理論の上では、大人の世界を知りつくしてゐた。美貌で若い母を持つ娘の機嫌——彼女の友として、否、戀人としても考へられそうな青年が母なる人の戀人、父なる人の變りにならうとは！

美しい母はいつしか鏡の前にはでな姿を、うつす事が多くなつて來た。そしてその度毎に、實枝子の苦しみは大きくなつた。

☆ ☆

今日も又仕事をおへ、夕食の支度をすませた母は、新調した背廣について、あれこれと不服をならべながら鏡に向つてゐる。

實枝子の目はするどくにらんだ。

電氣を背にして鏡の中の母の顔は、明暗の區別をつけ、怪奇な「あざ」ある女のやうに見え、彼女の恐怖感をつ

のらせた。

瞬間、後に向きなほつた母の顔に驚きの色が浮かんだ——とたんに「いけない」と實枝子の心は、自分の行動を強く否定したのである。

彼女のこんな經驗は、以前にも度々あつた事なのだ。そんな時、必ず彼女は自分を殺してしまふ。

弱い！

自分を亡ぼすなんて！

何故そのまゝ反抗出來ないのだ。

自己に對してどうしてそう誠實ではないのだ。だがしかし、義理にも人情にも無關心だつた、あの頃から、母は自分達をどんなに心配し、どんなに愛し續けて來てくれたらう。

時々我儘も通させて置いてくれた。

それなのに、今自分は、母の樂しみを幸福をうばひとつてしまはうとして居るではないか。さうだ！自分は母に對してもつと寛大でなければならぬ。

たへよう！ たへられるだけたへよう！

彼女は今までとうつて變つて、顔一ぱいに微笑をたたへながら「お母さん、とても素敵！ とてもおににあひになつてよ」と言つた。

若い母は今の出來事を忘れたかのやうにうれしげに「そう、でもこの縮少し大きくてはですぎないかしら、私なんぞもう齡をとつてゐるのだもん」と應じた。

「あらだつてそんな事ないわ、そんなに早くおばあちゃ

んになられては、私達困つてしまひますもの」「ホ、實枝子、貴女は私のお姑さんの様ねえ。私は何だかそんな氣がする」とはづしかけたボタンを、又元通りにかけなほしながら「ねえ、今夜夕飯を早くすまして、T市に映畫を観に行かうよ、いいだらう」「えい」「あ、それから二階にもそう言つておいで」。

實枝子は我にもあらずドキンとした。

あの青年。四ヶ月ばかり前から、二階の一間に陣どつて同棲してゐる、その男なのだ。

實枝子は殊更に同意の意をふかく表す様に、強くうなづいて、とりそろへられた夕飯の支度に目をやりながら、とんとんと階段の中途まで上りそこから靜かに、「松坂さん！ 松坂さん！……いらないの？……」と呼びかけた

ちよつと間をおいて力のない「いるよ、なんだ」と言ふ返事と共に、その松坂はからつと障子を開け、こちらに眞すぐ顔をつき出した。

「あのねえ、お母さんが今夜T市に映畫を観に行こうつて、御飯だからすぐ支度をして降りて來てね。」「OK今すぐ行くよ。えいと、ここは何頁かな、ああ……。」と、頁をめぐつてゐるやうだ。「御本讀んでいらつしたの。」「うん、お母さんからかりたんだ。つまらないがね、

「夫ある人々」と言うんだ。」「ああそれね、私もよんだわ、でもとても不自然だつたと思うわ。」「實枝子は何故かそう言つてみたかつた。

「そうかもしれない、だが人間なんて案外こんなものだ

よ、實枝ちゃんこんな事に反対か、俺も、まだ読み終つてはいないからほつきりわからないが、實枝ちゃん、あんたも憎悪はしてゐるが、いつかこんな氣持になるかもしれないよ。そう思はないや。」松坂は笑つては居るが眞けんに問ひつめた。實枝子の頭は思いなしにかゆがんで見え、口は眞一文字に結んでゐた。

彼女は、母が、何となくこの中のヒロインの性格とよく似てゐるような氣がしてゐた。とたんに、下から「何をそんな、むづかしい話をしてゐるの、そんな話にはきりがありやしない。そんな事をしてるとおくられてしまふわ。」とかんだかい母の聲が響いて來た。

實枝子は我にかへつて、救はれた様に、長い息をしたそう言へば、さつきから階段の中途に立つたまま話をしたてたもんだから、母のところまで良く聞えて行つたのであらう。

彼女は素直に「はい今すぐよ。」と答へて階段を一段一段強く下つた。

それと入替りに母は、せまい階段を實枝子にすりあふ様に足早に上つて行つた。

間もなく新妻の様にはしやいで「おかしいわ！ まるでほら異人さんが下駄をはいたやうよ。」と言つてる聲が聞えて來た。

實枝子は、むりに耳をふさいで、(いや、手でふさいだのではない。心で自分の耳をふさいだのだ)だまつて飯台の上の御飯茶碗の一つ一つに、ふかしかえしの白い

御飯をもち始めた。

「英治、幸子、御飯よ、早くおすわんなさいよ。——何してゐるの？」とさげんだ。幸子は、すぐに次の室からにこにことはしつて來たが、いつものくせで、英治は返事だけで、仲々出て來そうにもない。

無口で内氣なかはり、すばらしくデリケートな英治も又姉の様に、母に對してある種の不満を持つてゐるのだ。「英治さん、早くしないとだめよ。それから幸子一寸、お母さんと呼んでくれない？」彼女は一よつと「英治」を「英治さん」と呼ぶことがあつた。

呼ばれた母と英治と松坂は、靜かに飯台のまはりをかこんだ。もし終つた實枝子は、みんなと一諸に食事を進めたが、みそ汁とわさびのつくだにそれにつけもののまづしい食卓のせいも、心憂かつた。おかはりの幸子は元氣に茶碗をつき出した。「まあらんぼうね」と母がさとす様に言ふ。續いて、「いいさ、ひつそりして大人の様な子供ではつまんないからね、一たい子供に無邪氣がなくなつたらどうなると思う。味氣ないぢやないだらうかなあ。」と松坂は皆の顔を同じように一周りながめまわした。「それもそうねえ、實枝子なんかもう十七で子供でないけれども、時々、無邪氣になれないものかしらねえ。」と母は獨特な「ねえ」に力を入れてそう話した。言はれた實枝子は、さびしく笑つたが心の中では何か反撥したかつた。

そんな事言つたつて無理なんだ。母をうばはれた子が

どんなに寂しいか、お母さんには解らないのだ。たつた一人しか居ない親が他人にとられてしまふなんて、そんな事はいやだ！ そんな事はいやだ！ それなのに明るく無邪氣になれなんて虫がよすぎるわ。御母さんが他人にとられてしまつた今、私達姉弟はどうすればいいのうはべだけの親になつてくれるならなつてもらはない方がいいかも知れない。

私は否、弟も、そのために何かにすがりつきたいような氣持をもつてゐる事は事實だ。殊に私は父がはりに、又母がはりに何かをはつきり求めてゐる。妖婦のように異性から異性に自分を投げ出して行く女にでもなつたら、お母さんはなげくだろうか？ なげくだろう大聲で泣き出すかもしれない——、自分の事は知らないように……

「何を考へてしまつたんだ、目をつむつたりして」松坂の聲にさりげなく笑つてはみたが、今まで他人の話も耳に入らず、まじめに考へて居た事が何かしらん恥かしく白い耳たぶの紅にそまる事を感じた。複雑な氣持で夕飯もやつと終つた。後かたづけもかんたんにすませ、それぞれみんな夜度にとりかかつた。だが、英治だけは、「あんな所へ行くんなら、家でねころんでいた方がましさ。」と、つつけんどんに言ひ放して次の室にひつ込んでしまつた。實枝子は椅子の上にぬぎすてあつた學校の制服に袖を通さうと思つて取りあげると「あんな制服を着て行くの。」と傍に來た母がたづねた。「ええ、そう、うけなうの。」と「わるかないけど、たまには變つたのも

着たらどう。あんたや英治は、制服だけしか着たことがないんですもの」實枝子は服装にいざこざいうことをきらつて居たが、一も二もなく従つて少しはでなグリーン

のワンピースを着た。時計をみると、もう時間がない、母の「英治、家をたのむわ」の聲も氣ぜはしく驛にかけつけた。案の定氣車はブラットホームにはいつてゐた。飛びのつた四人は、はあはあ強い息をして居た。實枝子は食後すぐ飛んで來たので脇腹がさされるようにいたみを覚える。

汽車は間もなくホームを離れた。けたたましい氣笛が、淡く哀愁をそそつた。實枝子の心に突然、いつか小説で讀んだロマンチックな感情がふつと湧いて來た。そして小聲に「離別」「再會」「送り」「迎へ」と幾度となくくりかえしてみた。車中の人は誰も知らなかつた。みんな疲れ切つたような顔をして居た。女も子供も老人も居た。

ふとみると若い二人連れが車中でむつまじく、林檎の皮をむいて居る。窓外はせうせうたる秋風の中に枯草がつづいてゐた。

☆ ☆

T市のカルメンを上映してゐる洋畫館に入つた。濃えんなカルメンが土耳古風にこしかけオレンヂの皮をむきながら、深く輕蔑の眼をホセに投げかけ、又握りこぶしを腰にあてて殺してくれと叫んだところが特に印象的だつた。實枝子は、スクリーンに浮び上るカルメンをみ

るたびに、何故か恐ろしい感じがした。彼女はまだよくわからなかつた頃、本でよんだ事があつたが、あの時はメリメのたくみな描寫のみに心をうばはれ美しいスペインの地方色にあこがれた位だつた。あの、愛も死も、すべて心のままにしてゐたカルメンには、そこに懺悔の反省もなかつたのだらう。否、したかつたのだらうけれども出来なかつたに違ひない。懺悔道が、あまりにもむづかしく、正しい理観超越、即ち、超觀であるから！

歸宅しても、まだ、さめやらぬらしい母の感動が時々「ふー」とためいきになつてあらはされた。英治は、もうねてしまつたらしい。松坂も、もう二階の室に歸つてしまつた。

風呂から上つたばかりの母は顔をつやつやと小娘の様にほてらし、長い髪をぐつと櫛でとめて居た。

「お前！お風呂にお入りよ」と一言うながして、クリムの手を顔にあてながら、タオルの寝まきの小さい後姿を松坂のゐる二階の室にけした。

實枝子は、四角な火鉢の縁に強く顔をおしつけて瞑目した。戸が二つ三つがたがた鳴つた。風が出るらしい氣配である。

☆

☆

☆

☆

一般藥品

關内藥局

平市四丁目
電話四〇番

洋品・化粧品

…衣料品登録店…

うろこや

橋本義司

平市四丁目(常四〇一)

小間物 化粧品

ひらまつ

平市五丁目

お寫眞の御用命は

何でも……

三光館へ

田町驛前通り電1124



○山野の新緑がいつしか濃い色に變じて参りました。此頃それにともなつて警女高に於ける各クラブの活動も、本格的になつて参りました。文藝クラブではその活動の主なものとして、こゝに文藝雜誌「關井」を發刊致しました。

何しろこの様な事は始めてでもあり、豫想外の困難も多數ありましたが無事に第一號の發刊を見た事に對して、皆様と共に喜ばたいと存じます。一方編輯に於て皆様の満足させる様に出来なかつた事を深くお詫び致します。應募作品は余り多くありまして、二、三優れた作品も見受けられました。今後、この雜誌を向上發達させるため皆様の御協力をお願い致します。

○表紙は中西先生に特に腕を奮つていただきました。感謝しております。

○廣告は市内に於て警女高に特に御協力下さる各店よりいただきました。

關井 創刊號

(非賣品)

昭和二十四年七月十日 印刷
昭和二十四年七月十五日 發行

編輯兼發行人 警女高文藝部
印刷所 平市紺屋町十四 活版所

本は

加納

出版
販売

加納書店

紺屋町一五
電 四〇九

糸類裁縫具
手藝材料

佐野屋

平市才樋小路

運動具一般
體育機具
優勝旗カッ
各種運動靴
流行自製靴
靴及ビ
運動具修繕

大塚

電話七七

平市田町

読書人のようこびを
培びとする

角忠書店

本通二丁目三

電話 二八五番

三井文庫